

李清源の政治活動と朝鮮史研究

The Political Activities and Korean Historical Research of Lee Ch'ông-wôn

広瀬 貞三*

目次

はじめに
1・解放前の政治活動と朝鮮史研究
(1) 全協活動家から朝鮮史研究者へ
(2) 朝鮮史認識
(3) 再逮捕と帰国
2・解放後の政治活動と朝鮮史研究
(1) 越北と朝鮮史研究
(2) 1955年の朝鮮史論文
(3) 肅清
おわりに
[李清源著作目録]

はじめに

李清源（?～?）は1930年代から1950年代にかけて活動した朝鮮人の政治運動家、歴史学者である。彼は共産主義思想を持ち、その生涯は朝鮮独立のための政治運動と朝鮮史研究がしっかりと結びついていた。1945年以前は主に日本に滞在しながら民族独立運動に参加した。解放後は主に朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮とする）で建国事業に献身した。その一方では、1930年代から一貫して朝鮮史研究を進め、日本、北朝鮮で多くの著作、論文を執筆した。それにもかかわらず、李清源の政治活動と朝鮮史研究はこれまで研究者の関心を集めることがほとんどなく、いくつかの人名事典などで簡単に紹介されているにすぎない。(1)

私が李清源に注目するのは、次ぎの三点からである。第一に、彼が日本で政治運動に従事しながら、日本で主流だった史的唯物論の影響を受けて朝鮮史研究を進めた点である。その思想的影響は彼の朝鮮史研究をいかに規定したのだろうか。第二に、彼が北朝鮮の建国直後、科学院歴史研究所、金日成総合大学を中心に朝鮮史研究を続けた点である。彼は日本で身につけた史的唯物論を北朝鮮でいかに発展させたのだろうか。第三に、李清源が肅清された

*HIROSE, Teizou [情報文化学科]

1957年以降、北朝鮮における金日成の「英雄」化が始まり、歴史の偽造が本格化した点である。粛清されたとはいえ、朝鮮史研究において彼の存在は金日成の「英雄」化を阻止する一定の役割を果たしたのだろうか。

本稿はこうした問題意識を念頭に置き、今後の本格的な李清源研究に向けた基礎作業として、李清源の政治活動を可能な限り再構成し、その朝鮮史研究の特色を明かにする。

1・解放前の政治活動と朝鮮史研究

(1) 全協活動家から朝鮮史研究者へ

李清源の本名は、李青垣である。⁽²⁾咸鏡南道に生まれ、学歴は「普卒」(普通学校卒業)である。⁽³⁾出生年、出生郡ともに不詳である。朝鮮での経歴も明かではない。1929年頃日本に渡ったという。⁽⁴⁾李青垣は東京で自由労働者とし生活を続けて、次第に共産主義思想を持つようになったと思われる。

日本における朝鮮人の労働運動は、1925年2月に在日本朝鮮人労働総同盟(以下、在日朝鮮労総とする)が結成され、新たな転機を迎えた。組合員は自由労働者が中心であり、当初は12団体800名にすぎなかったが、1927年4月には約3万3000名の構成員を持つまでになった。しかし、赤色労働組合インターナショナル(プロフィンテルン)第4回大会、第2回太平洋労働組合の決定をうけ、在日朝鮮労総は解体し、1929年12月に日本労働組合全国協議会(以下、全協とする)への解消を決定した。解消論の中心となった活動家は、金斗鎔、李義錫、金浩永などである。また、1927年2月に結成された朝鮮共産党日本部(後に日本総局)は後にコミンテルン第6回大会の採択に従い、1931年12月に「解体声明書」を出した。これによって日本在住の朝鮮人共産主義者は日本共産党に加盟することになった。⁽⁵⁾

こうした組織変遷の過程で、李清源は自由労働者として、在日朝鮮労総から全協の活動家となり、日本共産党の影響下にあったと思われる。李清源は1934年9月現在、全協傘下の日本土木建築労働組合の土木本部東京支部再建準備委員会に属していた。東京支部にある3支部の内、城西地区担当である。また、彼は日本共産青年同盟(以下、共青と略す)中央部組織担当であり、東京、名古屋、関西、中部などを統括していた。この時点で官憲は李青垣を「非黨員」と見ている。こうした活動によって、李清源は1934年9月に治安維持法違反容疑で逮捕された。これが第一回目の逮捕である。⁽⁶⁾しかし、1934年12月10日、「共青、反帝、全協員」の李清源は起訴留保処分となる。⁽⁷⁾

この一方で、李清源は日本における朝鮮人のプロレタリア文化運動に参加した。1931年11月、芸術運動に従事する労働者を中心とした大衆的基礎を築くため、日本プロレタリア文化連盟（コップ）が発足した。コップはそれまでの全日本無産者芸術団体協議会（ナップ）を解散し、その傘下にあった日本プロレタリア作家同盟などの諸団体に加え、新たにプロレタリア科学研究所などを吸収して設立された。コップは婦人雑誌『働く婦人』、大衆雑誌『大衆の友』を刊行した。

日本に在住する朝鮮人たちはコップ内に朝鮮協議会（以下、朝協とする）を設置し、この動きに合流していった。朝協の活動方針は、「反ファシズムの文化闘争を通じて在日朝鮮労働者・農民をサークルに組織し、日本人労働者・農民に朝鮮問題を紹介し関心を高め日鮮プロレタリアートの革命的提携を強化する」ことだった。朝協は『朝協ニュース』とともに、コップ機関誌『大衆の友』の付録として朝鮮文の『우리 동무』（ウリトナム）を1932年6月から刊行した。編集長は初代金龍済、2代金斗鎔である。李清源は本名の李青垣で『우리 동무』1933年1月1日号に、「新興？「満州国」に朝鮮農民の生路—民族改良主義策動を粉碎せよ」を執筆した。⁽⁸⁾『우리 동무』刊行の中心メンバーは、金龍済、金斗鎔、朴石丁、李洪鐘などである。⁽⁹⁾このように李清源は全協活動家でありながら、朝鮮人プロレタリア文化運動の周辺に位置していたと思われる。

1934年12月に起訴留保処分となった李清源は、その後本格的に史観唯物論に立脚した朝鮮史研究に没頭し、次々とその成果を日本、朝鮮で発表した。では、李清源はどのような経緯で、朝鮮史研究に方向を転換したのだろうか。手がかりは、彼の最初の著書『朝鮮社会史読本』（1936年）の冒頭で、謝辞として「黒田、李北満、戸坂潤及び朴容七」の名前を挙げていることである。⁽¹⁰⁾

李北満は1906年忠清南道生まれ。1922年に渡日し、プロレタリア文学に関心をもち、1927年10月に朝鮮プロレタリア芸術同盟（カップ）東京支部を創設する。その後、無産者社、労働階級社の幹部として朝鮮人文化運動に従事した。1930年代には歴史研究にも力を注ぎ、『歴史科学』1932年4月号に「朝鮮に於ける土地所有形態の変遷」を執筆し、『歴史科学』1936年2月号には金台俊「檀君神話」（原文は『朝鮮中央日報』掲載）を翻訳している。⁽¹¹⁾1932年3月からプロレタリア科学研究所内で李北満、劉正植、金斗鎔などが中心となって「殖民地班」を組織し、「朝鮮ノ農業問題」等を題材として時々研究会を開催した。⁽¹²⁾『朝鮮社会史読本』の「発行者序」で、「数人の共同研究の成果を取り入れて苦心を重ね」⁽¹³⁾たといっていることは、

この研究会のことではなかろうか。

戸坂潤は1900年生まれ。唯物主義史観に立脚し、法政大学講師だった1932年10月に「唯物論研究会」を発足させた。同年11月から機関誌『唯物論研究』、『学芸』を73号まで発行した。歴史研究に関しては、日本古代史の早川二郎、佐久間達雄が積極的な研究を行っていた。⁽⁴⁴⁾ 李清源は1935年3月9日、唯物論研究会の社会科学部主催研究会で「アジア的生産様式と朝鮮封建社会史」を報告している。また、同年5月11日にも同研究会で「朝鮮封建社会史」を報告している。⁽⁴⁵⁾ ただ、唯物論研究会関係者の回顧録などに李清源のことはまったく登場しない。おそらく正式な会員ではなく、その周辺に位置していたと思われる。

朴容七は生没年不詳。1933年現在、日本反帝同盟中央部東京地方委員会明治大学班の活動家である。1935年に明治大学の朝鮮留学生同窓会の機関誌『同窓会報』の発行人となる。1936年6月に朝鮮留学生研学会（以下、研学会とする）を創立し、在京朝鮮人留学生の運動を統一した。研学会は「純粋なる学術団体」を標榜したが、実際に共産主義運動を進めた。⁽⁴⁶⁾

「黒田」だけは姓しか記されていないため、誰を指すのか明かではない。ここでは唯物論研究会の黒田善治（佐久達雄、青山和男）の可能性を挙げておく。黒田善治は1907年生まれ。1933年に戦闘的無神論者同盟（戦無）に参加し、1934年に検挙され、1935年に懲役2年執行猶予4年の刑を受けた。一方、唯物論研究会にも加わり、主に古代史部会で研究に従事していた。黒田は佐久達雄の名前で、『日本古代社会史』（白揚社、1934年）、『東洋古代社会史』（白揚社、1934年）などを刊行していた。⁽⁴⁷⁾

これら4名の関係から推測するに、李清源はプロレタリア文化運動で親交のあった李北満から朝鮮史研究の刺激を受け、唯物論研究会の戸坂潤、黒田善治から史的唯物論的な学問手法を学び、朴容七などの朝鮮人留学生の協力を得て朝鮮史研究を進めたと思われる。

（2）朝鮮史認識

李清源が行った朝鮮史研究の全体像はいまだ不明瞭だが、現在判明したものを巻末に「李清源著作目録」として掲載した。これを年度別に見ると、論文が1934年の2本から、1935年には10本へと一挙に急増する。1935年初頭から彼が朝鮮史研究に専念したことがうかがわれる。史的唯物論にたった個別論文を集大成し、李清源は1936年4月に1冊目の著書『朝鮮社会史読本』（白揚社）を刊行した。その直後の同年5月には改定版『朝鮮社会史読本』（白揚社）を刊行した。1ヶ月後に改定版を刊行したのは、発禁を防ぐための措置でなかったかと思われる。

さらに、李清源は1936年11月に2冊目の著書『朝鮮読本—朝鮮の社会とその政治・経済生活』(学芸社)を刊行した。続いて、李清源は1937年7月に3冊目の著書『朝鮮歴史読本』(白揚社)を刊行した。これは『朝鮮社会史読本』(改定版)に『朝鮮読本』の近現代史の部分を加え、再編集したものである。しかし、これは後に発禁処分となった。¹⁰⁸

李清源の朝鮮史認識はどのようなものであるのか。ここでは『朝鮮社会史読本』、『朝鮮読本』を中心にしてみる。『朝鮮社会史読本』は、古代史を俯瞰した通史である。目次は「第1編・朝鮮の原始社会、第2編・奴隷社会の開始と発展、第3編・封建社会としての李朝、第4編・資本主義の侵入」となっている。李清源は「序文」の中で、「儒教訓話的な、政策的な、半封建的「朝鮮学」は、朝鮮の歴史的過程を世界史とは全然別個・独立的な固有の神聖不可侵的な「五千年間の $\text{\textcircled{E}}$ (iEr)」を探求するに熱心であって、その公式の天才は「檀君」を粉飾し、その全体的な英雄は「李舜臣」の衣を借りて着、その才幹ある人達は「丁茶山」の仮面をかぶつて歴史を歪曲してゐる」と、震檀学会に集まった朝鮮人研究者たちを批判している。また、その一方では史的唯物論に依拠した白南雲『朝鮮社会経済史』(1933年)に対して、「一大画期的労作」ではあるが、「遺憾にも豊富なる内容にも拘はらず「公式主義」に陥つてゐる」として批判している。¹⁰⁹ 朝鮮の「特殊性・停滞性」を強調する李清源は朝鮮王朝の本質を、「村落生活を選び自己の家父長的・停滞的李朝は、極めて多くの、且つ極めて本質的な関係に於て、疑もなく、アジア的国家の一つであり、しかも最も野蛮な、中世的な、醜くも遅れた「アジア」国家の典型的な一つである」と結論づけた。¹¹⁰

『朝鮮読本』は、1860年代から1930年代までを扱った朝鮮近代史の通史である。全体で4編15章からなっている。目次は、「第1編・朝鮮問題の展望、第2編・朝鮮の社会と政治・経済生活の現段階、第3編・朝鮮の社会とその機構、第4編・今後の朝鮮」である。中でも中心は、第2編、第3編である。朝鮮の現状を厳しく批判しているために、『朝鮮社会史読本』と比較すると伏せ字が大量に含まれている。李清源は植民地期朝鮮社会を根底から規定した事件を土地調査事業とみる。「朝鮮農民の生活困難の根底的なものとしての半封建的土地所有は、必然的に半農奴的零細耕作を規定し、逆にこれは又前者に作用するもので、これは相互規定的なものである」、「軍義的半……主義の再現＝確保、そして……機構＝鍵鑰産業の体制の維持・確保の即ち内地資本蓄積の源泉の基本的な過程として、土地所有関係に於ける一応の再編成であった」とした。¹¹¹ この結果、朝鮮経済の現状を「封建的、半封建的吸取方法、農民拘迫の維持せられる状態の下に於ける封建的残存物の支配と農村に於ける、商業高利貸資本との結

合にある」と規定する。²³

(3) 再逮捕と帰国

李清源は朝鮮史研究の一方で、共産主義運動のために在日朝鮮人学生と接触を続けていた。1936年12月10日、朴容七が中心となり東京の明治大学、日本大学、中央大学など留学生が組織した「朝鮮留学生研会」の招きで、同会事務所（朝鮮基督青年館）において「朝鮮経済の現段階」と題する講演を行った。聴衆は140名だった。²⁴

李清源は1937年5月から「逃走」中だった。²⁵ 1938年4月以降、李清源は早稲田大学ウリ同窓会の朝鮮人学生高峻石、黄炳仁、宋君讚などと密かに会合した。李清源は彼らに「朝鮮革命論」、「朝鮮に於けるプロレタリア運動の過去と現在」、「朝鮮社会運動略史と今後の見通」などの原稿を見せた。1938年夏、李清源は「身に危険が迫りつつあることを感じて、どこかの朝鮮人「飯場」に逃げる準備をしていた」²⁶ という。

1940年5月15日、李清源は朝鮮人学生を指導し、朝鮮共産党の再建を図ったとして治安維持法違反容疑で逮捕された。これが二回目の逮捕である。特高は彼を「在京朝鮮人学生の共産主義運動、民族主義運動を指導」し、「在京朝鮮人各留学生の裏面に於ける指導者」と見ていた。²⁷ この根拠として、警視庁内鮮課は、李青垣、宋君讚、黄炳仁が共同作成したと称する「朝鮮革命論」、「朝鮮におけるプロレタリア運動の過去と現在」の原稿を入手していた。この草稿は、東京の朝鮮人学生を中心とした共産主義者の間で広く流布していた。三名は1938年の夏休みに「朝鮮各地の農村を廻りつつ共同で作成し昭和十三年九月上京の際トランクに入れて持参した」と自供した。官憲はこの草稿に対し、「近来稀に見る理論的なもので」、「彼等三名の共産主義理論のみでは到底作成し得ない位理論的なもので恐らくコミンテルン関係者の指導の下に作成したものと見て居」た。このため、朝鮮共産党が再建されたか、あるいは再建を企図する集団が残存しているのではないかと疑っていた。おそらく、これらの文書は李清源が執筆したものと思われる。²⁸

「朝鮮革命論」の内容は、コミンテルンが1928年に出した「12月テーゼ」に依拠し、「革命の性質」、「革命の推進力」、「将来の革命的性質及びプロレタリアートの此の革命に於ける任務」について述べたものである。朝鮮革命の性質は、「封建的ブルジョア民主主義のみならず其れは同時に反帝国主義革命でありそして之れは土地問題の徹底的な解決を其の社会的内容とする所の、従つて確実に社会主義革命に成長する前途をもつた革命である」と規定し、二

段階革命を遂行すべきと説いている。

朝鮮革命の推進力は、プロレタリア、農民、小ブルジョアインテリと位置付ける。「朝鮮革命の決定的推進力は朝鮮プロレタリアであり、「此の階級は最後まで真の民主主義者として帝国主義日本の如何なる妥協も譲歩もなし得ない軍事警察的支配の敵としてブルジョア民主主義革命の前衛闘士となり得る」とする。農民は「現段階のブルジョア民主主義革命の過程に於てはプロレタリアートの同盟軍として現われる」。また、「小ブルジョアインテリ」は、「(主として学生) 日本帝国主義の計画的な凡ゆる思想に対する凡ゆる研究探求、思慮に対する軍事警察的テロと反動的野蛮な行為は否応なしに反帝国主義にかり立てる」とした。

「プロレタリアートは闘争する全力をつくして而も日本帝国主義を打倒するために労働者農民の革命的民主主義的独裁を樹立するために封建的土地所有関係を掃蕩するため即ち農民を闘争に引入れ彼等の革命的力を利用するため八時間労働の獲得とその生活態度の徹底的改善のために闘争するであらう。而して軍事警察的封建的帝国主義日本からの解放を農奴主義的地主の土地所有権から解放を利用するであらう。世界プロレタリアートと結んで社会主義革命を実現するためにこのブルジョア民主主義革命を著しく進展せしめ而して社会主義革命の序幕として其れへの直前の一步とするために闘争するであらう」と結論付けている。²⁸⁾

李清源は1941年1月27日に起訴され、一番で懲役2年の判決を受けた。彼にとって初の実刑判決だった。²⁹⁾ 彼はこれを不服として上告したが、1942年9月6日に上告棄却となり、服役した。³⁰⁾ 李清源は1943年頃に出獄し、朝鮮に戻ったという。³¹⁾

2・解放後の政治活動と朝鮮史研究

(1) 越北と朝鮮史研究

1945年8月日本の敗戦により、朝鮮は解放を迎えた。日本の弾圧に耐えかねて転向した朝鮮人共産主義者は同年8月、急遽ソウルで会合を持った。李英、鄭柏、崔益翰、李承燁、李清源などが中心となり、いわゆる長安派共産党を作り上げた。³²⁾ しかし、長年地下に潜伏し活動を続けていた朴憲永がソウルに現われると、朝鮮共産党の再建は朴憲永が中心となった。長安派共産党もこれに合流したが、長安派共産党の中で、李英、崔益翰、鄭柏、李清源は最後まで反対の立場だった。同年9月11日に朴憲永による朝鮮共産党が再建された後も、「金日成の後援を得て朴憲永打倒と朝鮮共産党破壊活動を継続した。かれらはソウルで最終的に失敗するや平壤に逃げて金日成の庇護を受けたことは公然の事実である」³³⁾ という。

李清源は1946年2月、民主主義民族戦線土地農業問題研究委員となった。1946年秋に越北したという。⁶⁴ 李清源は越北した後、1946年12月北朝鮮臨時人民委員会（金日成委員長）の宣伝部長に就任した。⁶⁵ 李清源は宣伝部長として、同年12月、「モスクワ三国外相会談決定一周年記念宣伝要綱」を「北朝鮮民主主義民族統一戦線」に送っている。⁶⁶

しかし、この後は政治活動から離れ、専門の朝鮮史研究に従事する。1947年2月、北朝鮮人民委員会（金日成委員長）は朝鮮歴史編纂委員会を設置した。朝鮮歴史編纂委員会は、中等学校用朝鮮歴史教科書を準備することが目的だった。同年に同委員会は『朝鮮歴史研究論文集』を刊行し、さらに李清源の著書『朝鮮近代史研究』を刊行した。また、1948年8月から1950年まで機関誌『歴史諸問題』を18号にわたって刊行した。⁶⁷

1947年3月に李清源は金日成総合大学歴史学部の教授となった。⁶⁸ 金日成総合大学（許憲総長）は1946年10月に創立されたばかりの総合大学であり、この時点では北朝鮮における唯一の大学だった。李清源は『歴史諸問題』の1号（1948年8月）から4号（同年11月）まで毎号論文を執筆し、旺盛な研究ぶりを示している。彼の論文の題目は、「江華条約の歴史的教訓と締結当時の国内情勢」（1号）、「金日成將軍パルチザン闘争の歴史的意義」（2号）、「甲午農民戦争の性格とその歴史的意義」（3号）、「20世紀初朝鮮の対外関係と国内情勢」（4号）と多岐にわたっている。特に、「金日成將軍パルチザン闘争の歴史的意義」（2号）では「朝鮮人民革命軍」の存在を特記し、最も早い時期に金日成の「英雄」化に寄与したことで注目される。⁶⁹

1948年9月に北朝鮮が建国された。建国直後の北朝鮮で、李清源は朝鮮史研究の最高峰として高い評価を受け、金日成大学歴史学部長、国家歴史編纂委員会委員長、科学院社会科学研究所所長など要職を務めた。⁴⁰

1948年10月には新たに朝鮮歴史編纂委員が選定され、1949年1月に朝鮮歴史編纂委員会（白南雲委員長）が設置された。委員は洪命熹、崔昌益など28名で、4つの分科委員会（原始史、古代史、封建史、最近世史）が設置された。最近世史の委員は、金承化、洪命熹、崔昌益、朴時亨、奇石福、金洸鎮、金斗鎔、朴東礎、金庚寅、柳文華、朴庚守、李東華など12名である。⁴⁰ この成果として1949年10月、朝鮮歴史編纂委員会『朝鮮民族解放闘争史』が金日成総合大学から刊行された。著者は8名（白南雲、朴時亨、柳文華、金斗鎔、金洸鎮、金庚寅、金承化、崔昌益）である。前掲12名の内、6名が執筆している。全7章の内、三・一独立運動から解放までの3章分を延安派の崔昌益が一人で執筆しているのが特徴である。⁴²

1950年6月に北朝鮮は朝鮮戦争を引き起こす。アメリカが朝鮮戦争に介入すると、李清源は

1951年に『米帝朝鮮侵略史』を執筆した。戦争中の1952年12月、科学院（洪命熹院長、崔三悦副院長）が設立された。科学院には常任委員会と書記局があり、その傘下には歴史、考古学及び民俗学、言語文学、経済法学、物理数学、化学、医薬学、生物学など8研究所が設置される。科学院は機関誌『科学院報』を発行した。⁴³ 初代の歴史研究所所長には李清源が就任したと思われる。

1952年に李清源は『朝鮮近代史研究』（1947年刊行）のロシア語版を刊行した。李清源はこの時、内容の一部を「修正補充」した。このロシア語版をもとに1955年に中国語版が、1956年に日本語版が刊行された。また、ポーランド語版、ハンガリー語版も刊行された。つまりこの著書は北朝鮮政府が公認した最初の朝鮮歴史書といえる。ロシア人のエム・ペー・キムは「朝鮮解放後まもなく現われた朝鮮史に関する最初の著作の一つ」で、「マルクス主義の立場から朝鮮史を叙述しようとした最初の試みの一つである」とその意義を記している。

李清源の『朝鮮近代史研究』の目次を見ると、次ぎの通りである。

- 1章 対外に「開放」の時期の朝鮮
- 2章 日本資本主義の朝鮮侵入と江華条約。この条約の諸結果
- 3章 甲申政変（1884年12月）と朝鮮における日本の膨張の強化。人民大衆の状態の悪化
- 4章 1894年の農民戦争と1894-95年の日清戦争
- 5章 極東における帝国主義的矛盾の増大と朝鮮
- 6章 朝鮮の日本帝国主義の植民地への転化
- 7章 朝鮮人民大衆の政治的覚醒と日本帝国主義にたいする彼らの闘争
- 8章 朝鮮における植民地制度と朝鮮人民の状態。三一運動以前の民族解放闘争⁴⁴

朝鮮戦争の最中に、金日成は北朝鮮内で激烈な権力闘争を展開する。まず国内派の粛清にのりだした。1953年8月、李承燁、趙一明、林和、朴勝源、李康国、襄哲、尹淳達、李源朝など12名の朝鮮労働党幹部が粛清された。続いて1955年12月、国内派の最高指導者朴憲永（党副委員長、内閣副主席兼外相）が粛清された。国内派に関連ある南朝鮮出身者の多くが粛清の中で追放され、「宗派」の烙印をおされた。⁴⁵ しかし、李清源は国内派に対する苛酷な粛清を生き延び、さらに歴史研究者としての地位を高めていく。

（2）1955年の朝鮮史論文

1955年は解放後における李清源の執筆活動が最も活発な時だった。その舞台となったのは、

1955年1月から科学院歴史研究所が刊行した機関紙『歴史科学』である。編集委員は李清源(責任編集委員)、金洗鎮、金正道、都宥浩、朴時亨、全錫淡、許ガップの7名である。⁴⁶⁾ 李清源は同年3月、「三・一運動と朝鮮民族解放運動」を『歴史科学』1955年3号に発表した。彼は三・一運動の歴史的意義に関して、次の五点をあげている。「第一に、プロレタリア革命時期の民族解放運動として、朝鮮民族解放運動において特徴的な意義を持っている」、「第二に、朝鮮人民は三・一運動を通じて革命的な波濤の中で小ブルジョア、及びブルジョアインテリの脆弱性と彼等の思想的表現であるブルジョア民族主義の虚無放逸さを認識することになり、彼等が自分たちの階級的利益のために結局は日本人と歩調を合わせていることを知ることになった」、「第三に、三・一運動を通じて朝鮮人民は血の教訓を得たが、それは日帝植民地統治に打ち勝ち、自由と解放を勝ち取るための成果的な闘争を展開するためには必ず革命的な政党の領導がなければならず、こうした前衛党がなくては自由と解放のための闘争で勝利を勝ち取ることができないことを固く知った」、「第四に、三・一運動を通じて、民族的覚醒とともに、勤労人民の階級意識、特に労働階級の階級意識が成長し、これは闘争を通じて労働階級の領導下で農民との同盟、反日民族統一戦線の土台を築き挙げた」、「第五に、三・一運動は朝鮮民族解放運動においてだけでなく、植民地民族解放闘争思想に巨大な意義をもった」。⁴⁷⁾ 特に、第四の指摘が重要である。

続いて、同年9月、10月に「反日民族解放闘争におけるプロレタリアート・ヘゲモニーのための闘争」(以下、「ヘゲモニーのための闘争」とする)を各々『歴史科学』9月号、10月に掲載した。これは1920年代から1940年代の朝鮮の民族解放闘争を詳述したもので、合計76頁にも及ぶ大作である。李清源は朝鮮においてプロレタリアート・ヘゲモニーが成立した時期を、①1920年代説、②1930年代説、③8・15解放以降説と、三つの見解があるとし、彼は1930年代説に立った。

李清源は「朝鮮におけるプロレタリアートのヘゲモニーのための闘争とその実現の特徴」として、次ぎの五点をあげている。「第一に、(中略)プロレタリアートが朝鮮の社会生活で重要な役割を行うとすぐ始まったこと」、「第二に、プロレタリアートのヘゲモニーの成立が武装闘争の過程を通じてなされたこと」、「第三に、労働者・農民の同盟を基礎にした広範囲な統一戦線運動と連結していたこと」、「第四に、朝鮮でのプロレタリアート・ヘゲモニー実現は朝鮮革命運動の特種な条件によって、たとえ共産党はなかったが金日成同志を首班としたパルチザン闘争の指導的核心理念によって、彼等がマルクス・レーニン主義を朝鮮の現実に正

しく適用する過程を通じて実現されたこと」。⁶⁸

同年10月7日、科学院歴史研究所主催で「8・15解放10周年記念科学セシア」が開催された。李清源は論文「ヘゲモニーのための闘争」の内容を要約した「朝鮮におけるプロレタリアート・ヘゲモニーのための闘争」を報告した。しかし、この報告には多くの疑問が投げかけられた。⁶⁹ このため、同年10月30日、李清源の「ヘゲモニーのための闘争」の討論会が120余名の参加によって行われた。李清源が提示した多くの論点の中で、次の二点に議論が集中した。第一点は、プロレタリアート・ヘゲモニー樹立の時期である。彼はこの「樹立時期を1930年代前半期とみて、民族ブルジョアジーの孤立化過程と関連付けた」。しかし、反対者は樹立の時期を、1920年代後半期と主張した。第二は、朝鮮労働者階級のヘゲモニー争奪における闘争の対象である。李清源に対する主な反論は、「朝鮮民族ブルジョアジーの一般ではなく、小ブルジョア民族主義者である」との見解だった。⁷⁰ この論文は後に彼が粛清される原因となった。

1956年4月、第3回朝鮮労働党大会が開催された。この大会は北朝鮮の朝鮮史研究において大きな転回点となった。金日成首相はここで、朝鮮の労働運動史、民族解放闘争史に対する従来の研究を痛烈に批判した。金日成は「われわれが、過去におこなわれたわが国の労働運動と、民族解放闘争の経験を研究せずに、どうして朝鮮革命を正しく遂行することが出来るだろうか？われわれは、わが国で長期間にわたって展開された労働運動と民族解放闘争の歴史を慎重に研究し、またわが国の革命闘争の経験と教訓をもつて党員を教育しなければならない」⁷¹と述べた。

大会5日目の4月27日、金日成のこの提案を李清源は積極的に受け入れた。⁷² これ以降、北朝鮮における朝鮮近代史の記述において金日成のバルチザン活動を誇張する傾向が強まり、朝鮮人共産主義者による朝鮮内の活動や、中国内の独立運動を抹殺する傾向が強まっていく。

第3回労働党大会の人事において金日成の抗日バルチザン派が国内派を追放し、権力をほぼ掌握した。功績を認められた李清源は初の中央委員候補となる。中央委員候補45名のうち、国内派はわずか5名（李達進、李清源、丁七星、白南雲、李北鳴）だった。⁷³ 国内派の中でも朴憲永とは距離を置き、金日成を強く支持した人物のみが生き残ったと思われる。さらに、李清源は1956年5月に科学院常務委員兼科学院社会科学部門委員長となる。⁷⁴

しかし、1956年7月までに李清源は『歴史科学』の責任編集委員をこれまで編集委員ですらなかった金錫亨（研究士）に譲り、一編集委員に降格している。前掲の批判が関連している

のではないと思われる。同じく編集委員の金洸鎮の名前が消えたのも、これらの批判に関連があるかもしれない。⁶⁸ この頃、歴史研究所所長の職を金錫亨に譲ったと思われる。

1956年7月に李清源は前記の論文「ヘゲモニーのための闘争」をまとめなおし、『朝鮮におけるプロレタリアート・ヘゲモニーのための闘争』（科学院）を刊行した。⁶⁹ 李清源はこの本の特徴を、「日本帝国主義者の朝鮮にたいする植民地政策と日本帝国主義者植民地略奪者どもに反対し、祖国解放のための朝鮮人民の血みどろのための闘い」を分析・論述したもので、換言すれば「朝鮮労働運動史」であると述べている。⁶⁹ 科学院における李清源の次の研究課題（1956年6月～1957年12月）は甲午農民戦争であった。⁶⁹

（3）肅清

緊張をはらみながらも政治的な安定を維持してきた李清源の立場に決定的な影響を与えたのは、金日成による延安派、ソ連派の大規模な肅清だった。1956年8月、朝鮮労働党中央委員会総会（八月全員会議）において、崔昌益（延安派）、朴昌玉（ソ連派）らは金日成体制を厳しく攻撃した。しかし、金日成の強力な反撃にあい、延安派、ソ連派は一挙に崩壊する。この影響で金日成総合大学の金成勲総長、金正道歴史学部部長も逮捕された。延安派、ソ連派につながる人々が大量に抹殺された。⁶⁹ 金正道は創刊以来『歴史科学』の編修委員だったが、1957年1号（同年2月）を最後に編集委員から消えている。⁶⁹

崔昌益、朴昌玉らに関連した者を肅清する「集中事業」は平壤市党から始まり、各道党、各郡党で熱誠者大会が開かれ、「反党宗派集団」に対する摘発が続いた。特に「宗派」の歴史性と害毒性を暴露する事業が進んだ。⁶⁹ 科学院でも「八月宗派反政府陰謀」に荷担した人々に対する厳しい思想闘争の幕が上がった。成憲琅はその様子を、「科学院における八月宗派闘争において対象となったのは、日頃へつらうことをせず自分の主張を述べる学者や、成分のよくない人、古いインテリたちだった。彼らに対する罪名や批判の種は、反政府陰謀となんらのかかわりも見出せず、「反金日成」にも結びつけることができなかつた」⁶⁹ と述べている。

前に述べたように、1956年9月李清源の『朝鮮近代史』（日本語版）が刊行された。李清源は同年7月に執筆した「日本の読者のみなさまへ」の中で、「歴史の真相を明かにすると同時に、帝国主義御用学者たちの朝鮮近代史に対する歪曲と偽造とを、批判暴露することを目的」⁶⁹ としたと述べている。

しかし、この直後に「宗派肅清事業」の余波が李清源にも波及した。その契機は3ヶ月に前

に刊行したばかりの著書だった。同年10月30日、科学院で李清源著『朝鮮におけるプロレタリアートヘゲモニーのための闘争』に関する合評会（3回目）が開催された。今回はこれまでも増して、一層厳しい批判にさらされた。著書は一定の評価を受けたものの、何よりも「日帝下わが国の革命運動発展と労働運動で大きな障害となった宗派問題についてさらに十分な科学的解明と分析が加わっていない」点が批判された。具体的には、「第一に、朝鮮におけるプロレタリアートの形成とそのヘゲモニー樹立過程は時期的に同一に考察されなければならないとする見解」である。つまり、李清源は「プロレタリアートが形成があった後にそのヘゲモニー樹立が実現されたとする論理を展開しているが、この両者間に一定の段階を設定するのは不当だ」とする批判である。第二に、新幹会についての評価である。李清源は「これがわが国で最初の反帝統一戦線組織体と規定した」ことに対し、「新幹会を反帝統一戦線組織と見ることはできず、これは純粋に一個の反日団体にすぎない」⁶⁴とする批判だった。

同年12月4日から6日にかけて、科学院歴史研究所で「朝鮮におけるブルジョア民族形成に関する討論会」が開催された。金錫亨所長の開会宣言に続き、李清源は歴史研究所近代・現代研究室室長として、この問題の重要性を強調し、三日目の討論でも発言している。⁶⁵この時点ではからくもその地位に止まったといえる。

しかし、1957年に入ると朝鮮史研究に対する朝鮮労働党の支配力がさらに強まった。同年1月、科学院歴史研究所にこれまであった2つの研究室（古代・中世、近代・現代）に加えて、新たに哲学研究室が新設された。これにあわせて、黄長燁（金日成総合大学哲学講座長）が『歴史科学』の編集委員に加わった。哲学研究室は「形式主義と教条主義、及び修正主義を反対する闘争の模範を示す」とした。⁶⁶

金錫亨所長は1957年6月、「朝鮮歴史研究の基礎促成のために」と題する論文で、金日成の指導を全面的受け入れる立場を表明した。彼は「朝鮮労働党第3次大会で陳述した金日成同志の報告とこの大会で採択された決定書はわが国科学研究事業に対する評価とその将来の発展のために総体的路線が明示された」。「わが史学界で発露している教条主義、形式主義、主体性の欠如などの否定的現象は他人のものを「典型的」であり、われわれのものは「非典型的」だという先入観から出発し、わが国の現実を外国のそれと機械的に比較するとこに求めることができる」と厳しく批判した。⁶⁷この「教条主義、形式主義、主体性の欠如」として批判された者こそが、李清源であった。

李清源に対する批判は急速に高まった。1956年12月の時点で歴史研究所の近代・現代研究

室室長だった李清源は、1957年9月から10月の間に『歴史科学』の編集委員から消えた。⁶⁸おそらくこの期間に完全に粛清されたものと思われる。李清源の義父崔益翰は第3次朝鮮共産党再建に中心的な役割をはたした人物で、解放前は延安派の崔昌益と同じM・L派に属していた。このことも彼の粛清に関係があろう。⁶⁹

李清源の粛清と交錯するように、1958年に入ると、第3回労働党大会における金日成の指示にそった朝鮮近代史が次々と刊行される。これらは植民期の独立運動を金日成中心に描き、歴史の偽造ともいえる通史が書かれ始めた。1958年3月、科学院の李羅英は1949年版『朝鮮民族解放闘争史』に多くの修正を加え、同名の『朝鮮民族解放闘争史』を刊行した。李羅英は「崔昌益をはじめとする一部の反党分派分子らは、けがらわしい分派的目的から出発してこの部門の歴史研究に多くの歪曲と害毒をもたらした。かれらは、解放前の朝鮮労働運動におよぼした分派の害毒をおおいかくしたばかりでなく、かえってこれを朝鮮人民の「革命伝統」であるかのように粉飾しようとし、他方では金日成同志を先頭とする堅実な共産主義者たちが組織し、展開した抗日武装闘争を通じて形成された真の革命伝統を歪曲し、過少評価し、抹殺しようとした」⁷⁰と述べている。この本の特徴は、次の二点である。第一に全10章のうち2章を金日成の活動にあてるなど、個人崇拜が開始したことである。第二には、朝鮮共産党の活動とその影響を「分派の害毒」と記述したことである。

さらに、1958年に科学院歴史研究所編『朝鮮通史』（科学院出版社）下巻が刊行された。『朝鮮通史』下巻は19世紀中期から1956年末までを15章でまとめている。この下巻の書評で、キムヨンスクは「この通史は過去わが歴史学界に参入した崔昌益を頭目とする反党宗派分子の悪辣な思想的余毒を清算する闘争過程で成し遂げられた」⁷¹と述べている。李清源はこの「反党宗派分子」の中に含まれたのである。

1959年12月、金昌満党中央委員は科学院歴史研究所で開催された「党歴史執筆要綱」討論会の席上で李清源を名指して、次ぎのように批判した。「他人がすでに作り出した公式、既成命題をもってわが国の歴史を合わせてはいけぬ。ここで標本となるのは李清源のような人間である。この人間は巷間で言われている通りに表現すれば、糊と鉄で歴史を書いている。そのように歴史を書くのは容易なことだ」。⁷²1930年代から朝鮮史研究を続けた李清源はいまや弾劾を受けたまま、歴史の闇に消えていった。没年は不詳である。

おわりに

以上、李清源の政治活動の実態と朝鮮史研究の特色を明かにしてきた。

李清源は咸鏡南道（郡名は不詳）で出生し、普通学校を卒業し、1929年頃に日本に渡ってきた。彼は全協傘下の日本土木建築労働組合の活動家として、1934年9月、1940年5月の2回逮捕される。その一方、1934年から本格的に朝鮮史研究を開始し、『朝鮮社会史読本』、『朝鮮読本』など日本、朝鮮で多くの研究成果を発表した。彼の朝鮮史研究は当時日本で主流だった史的唯物論の影響を受け、朝鮮史の停滞性を強調する面を持っていた。しかし、土地調査事業など植民地朝鮮の実態を冷静に分析している。

解放後は長安派共産党の結成に参加した後、1946年秋に越北した。彼は建国直後の北朝鮮で朝鮮史研究の最高峰に立ち、朝鮮歴史編纂委員会、金日成総合大学、科学院歴史研究所を中心に執筆活動を続けた。その成果として、『朝鮮近代史』、『米帝朝鮮侵略史』、『朝鮮におけるプロレタリアートのための闘争』などの著作、論文を次々と表した。特に1955年は彼の生涯で最も朝鮮史研究が進展した時だった。解放以前は研究できなかった三・一独立運動の分析や、植民地期における朝鮮労働運動の研究に取り組んだ。

しかし、1957年初頭から延安派、ソ連派に対する粛清の影響を受けた。彼の朝鮮史研究は「形式主義」、「教条主義」、「修正主義」と厳しい批判に晒され、1957年9月～10月頃に粛清されたと思われる。

李清源の生涯は、朝鮮での成長過程、日本での政治活動、北朝鮮における粛清の状況など、いまだ不明な部分が多い。詳細な歴史的事実の発掘と、彼の朝鮮史研究の本格的な分析は今後の課題とする。

〔補註〕

- (1) 姜萬吉・成大慶編『韓国社会主義運動人名事典』（創作と批評社、1996年）381～382頁（以下、『人名事典』とする）。近代日本社会運動史人物辞典編修委員会編『近代日本社会運動史人物大事典』4巻（日外アソシエーツ、1997年）917頁（水野直樹執筆）（以下、『人物大事典』とする）。
- (2) 李清源『朝鮮読本—朝鮮の社会とその政治・経済生活』（学芸社、1936）頁数なし。「本書を敬愛する我が母上に献ける 李青垣」とある。（以下、『朝鮮読本』とする）
- (3) 『特高月報』1940年5月、朴慶植編『在日朝鮮人関係運動資料集成』4巻（三一書房、1976

- 年) 139、153頁 (以下、『資料集成』とする)。「1930年代日本で大学卒業」とするものがあるが、確認できない。北韓総鑑刊行委員会編『北韓総鑑・45～68年版』(共産圏問題研究所、1968年) 1044頁。
- (4) 前掲書『人名事典』381頁。
- (5) 朴慶植『在日朝鮮人運動史—8・15解放前』(三一書房、1979年) 131～134、160～163、216頁。金仁徳著外村大訳「在日本朝鮮労働総同盟についての一考察」『在日朝鮮人史研究』26号(1996年9月) 74～98頁。
- (6) 『社会運動の状況』1934年、『資料集成』3巻、139、153頁。
- (7) 『特高月報』1934年、『資料集成』3巻、836頁。
- (8) 前掲朴慶植著書『在日朝鮮人運動史—8・15解放前』277～278頁。
- (9) 『社会運動の状況』1933年、『資料集成』2巻、759頁。金斗鎔に関しては、藤石貴代「金斗鎔と在日朝鮮人文化運動」、大村益夫編『近代朝鮮文学における日本との関連様相』(緑蔭書房、1998年)。鄭栄桓「金斗鎔と「プロレタリア国際主義」」『在日朝鮮人史研究』33号(2003年10月) 参照。
- (10) 李清源『朝鮮社会史読本』(白楊社、1936年) 3頁。
- (11) 『思想月報』18号(1935年12月)、『資料集成』4巻、887頁。前掲書『人物大事典』4巻、930～931頁。申銀珠「中野重治と李北満・金斗鎔」『梨の花通信』39号(2001年4月) 参照。
- (12) 『社会運動の状況』1929年、『資料集成』2巻、761頁。
- (13) 李清源『朝鮮社会史読本』2頁。
- (14) 戸坂潤の著作には、『戸坂潤集』(筑摩書房、1976年)、『日本イデオロギー論』(岩波書店、1977年)、『戸坂潤全集』全5巻・別巻(勁草書房、1979年)、『思想と風俗』(平凡社、2001年) などがある。また、田辺元他『回想の戸坂潤』(勁草書房、1976年)、山田洸『戸坂潤とその時代』(花伝社、1990年) など参照。
- (15) 「報告」『唯物論研究』30号(1935年4月) 197頁。「報告」『唯物論研究』32号(1935年6月) 145頁。
- (16) 前掲書『人物大事典』4巻、212頁(長沢秀執筆)、『社会運動の状況』1938年、『資料集成』4巻、95～98頁。
- (17) 前掲書『人物大事典』2巻、475～6頁(本村四郎執筆)。戦闘的無神論者同盟に関しては、田中真人『一九三〇年代日本共産党研究』(三一書房、1994年) 207～210頁参照。

- (18) 前掲書『人物大事典』4巻、917頁。
- (19) 李清源『朝鮮社会史読本』3頁。
- (20) 李清源『朝鮮社会史読本』228頁。
- (21) 李清源『朝鮮読本』317頁。
- (22) 李清源『朝鮮読本』105頁。
- (23) 『特高月報』1936年、『資料集成』3巻、849頁。
- (24) 『社会運動の状況』1938年、『資料集成』4巻、237～238頁。
- (25) 高峻石『越境一朝鮮人・私の記録』（社会評論社、1977年）177～178頁。
- (26) 『特高月報』1940年5月、『資料集成』4巻、543頁。
- (27) 坂本検事「内地に在住する朝鮮人の支那事変後の思想傾向」『思想月報』19号（1939年6月）201頁。ここでは「左翼学生李青恒」と記載されている。また、「宋君瓚」とあるが、「宋君讚」の誤りである。
- (28) 「朝鮮革命論」『思想月報』19号（1939年6月）327～338頁。
- (29) 前掲書『人物大事典』4巻、917頁。
- (30) 『特高月報』1943年、『資料集成』4巻、1078頁。
- (31) 前掲書『人名事典』382頁。
- (32) 徐大肅著金進訳『朝鮮共産主義運動史・1918～1948』（コリア評論社、1970年）292頁。
- (33) バックカプトン『歎きの朝鮮革命』（三一書房、1975年）158、171頁。
- (34) 前掲書『人名事典』382頁。
- (35) 前掲書『北韓総鑑・45～68年版』1044頁。
- (36) 金俊燁・金昌順・李一善・朴實玉編『「北韓」研究資料集』第一集（高麗大学校出版部、1969年）177～178頁。
- (37) 李清源著川久保公夫・呉在陽訳『朝鮮近代史』（大月書店、1956年）286頁。
- (38) 前掲書『北韓総鑑・45～68年版』1044頁。
- (39) 和田春樹『金日成と満州抗日戦争』（平凡社、1992年）157頁。国史編纂委員会編『北韓歴史学論著目録』（下）（同会、2001年）1208～1209頁。
- (40) 徐大肅著林茂訳『金日成・思想と政治体制』（御茶の水書房、1992年）424～425頁。（以下、『金日成』とする）。
- (41) 李光麟「北韓の歴史学」、『韓国近現代史論攷』（一潮閣、1999年）137～141頁。

- (42) 朝鮮歴史編纂委員会編朝鮮歴史研究会訳『朝鮮民族解放闘争史』(三一書房、1952年) 目次。
- (43) 任正嫻『朝鮮科学文化史へのアプローチ』(明石書店、1995年) 165頁。前掲李光麟論文「北韓の歴史学」、『韓国近現代史論攷』140、156頁。
- (44) 李清源『朝鮮近代史』目次。
- (45) 前掲徐大肅著書『金日成』144～154頁。
- (46) 『歴史科学』1955年2号(同年2月) 奥付け。
- (47) 李清源「三一運動と朝鮮民族解放運動」『歴史科学』1955年3号(同年3月) 1～41頁。
- (48) 李清源「反日民族解放闘争におけるプロレタリアート・ヘゲモニーのための闘争」(上・下)『歴史科学』1955年9号(同年9月) 1～36頁、10号(同年10月) 1～40頁。
- (49) 「8・15解放10周年記念科学セシア」『歴史科学』1955年11号(同年11月) 116～123頁。
- (50) 「8・15解放10周年記念科学セシア」『歴史科学』1955年12号(同年12月) 130～133頁。
- (51) 外国文出版社編『朝鮮労働党第三回大会文献』(同、1956年) 135頁。李羅英著朝鮮問題研究所訳『朝鮮民族解放闘争史』(新日本出版社、1960年) 1頁。
- (52) 在日本朝鮮人総連合会中央委員会翻訳委員会訳『朝鮮労働党第三回大会—中央委員会報告』(学友書房、1956年) 178頁。前掲徐大肅著書『金日成』166頁。
- (53) 前掲和田春樹著書『金日成と満州抗日戦争』371頁。
- (54) 前掲書『北韓総鑑・45～68年版』1044頁。
- (55) 『歴史科学』1956年4号(同年7月) 奥付。
- (56) 「新刊図書案内」『歴史科学』1956年4号(同年7月) 奥付。
- (57) 李清源『朝鮮近代史』頁数なし。
- (58) 「学界消息」『歴史科学』1957年2号(同年4月) 98～99頁。
- (59) 高峻石『金日成体制の形成と危機』(社会評論社、1993年) 155頁。前掲徐大肅著書『金日成』168～172頁。
- (60) 『歴史科学』1957年1号(同年2月) 奥付。
- (61) 方仁厚『北韓「朝鮮労働党」の形成と発展』(高麗大学校亜細亜問題研究所、1967年) 228～229頁。
- (62) 成蕙琅著萩原遼訳『北朝鮮はるかなり—金正日官邸で暮らした20年』(文芸春秋、2003年) 244～249頁。
- (63) 李清源『朝鮮近代史』頁数なし。

- (64)「候補院士李清源著『朝鮮におけるプロレタリアートヘゲモニーのための闘争』に対する合評会」『歴史科学』1957年1号（同年2月）90～92頁。
- (65)「朝鮮におけるブルジョア民族形成に関する討論会」『歴史科学』1957年1号（同年2月）92～98頁。
- (66)「哲学研究室の課業」『歴史科学』1957年1号（同年2月）1頁、奥付。
- (67)金錫亨「朝鮮歴史研究の基礎促成のために」『歴史科学』1957年3号（同年6月）6～11頁。
- (68)『歴史科学』1957年5号（同年11月）奥付。李清源の肅清について梶村秀樹は、「状況の変化とともに、旧来の研究と共和国民衆にとって必要な自国史像の間にずれが生じていたことが、不可避的な講座派的歴史像からの脱却のより本質的な原因であろう」（「日本帝国主義の問題」『梶村秀樹著作集』2巻、（明石書房、1993年、318頁）と述べている。しかし、これは主客が転倒した見解であり、金日成「英雄」化の動きを軽視している。
- (69)前掲書『人名事典』501頁。崔益翰の解放直前の状況に関しては、崔益翰「弁白状」、翰林大学校アジア文化研究所編『朝鮮共産党文献資料集（1945～46）』（同大学校出版部、1993年）177～179頁。崔益翰は解放後、李清源と同様に北朝鮮で歴史研究に従事し、『朝鮮社会政策史』（1947年）、『実学派と丁茶山』（1955年）などを刊行した。
- (70)前掲李羅英著書『朝鮮民族解放闘争史』2頁。
- (71)キムヨンスク「《朝鮮通史》（下）に関して」『歴史科学』1959年2号（同年4月）61～69頁。
- (72)金昌満「朝鮮労働党歴史研究で提起されているいくつかの問題」『歴史科学』1960年1号（同年2月）3頁。前掲徐大粛著書『金日成』197頁。

〔李清源著作目録〕

1・著作・翻訳

- 『朝鮮社会史読本』（白揚社、1936年）（日本語）
- 『朝鮮社会史読本・改定版』（白揚社、1936年）（日本語）
- 『朝鮮読本—朝鮮の社会とその政治・経済生活』（学芸社、1936年）（日本語）
- 『朝鮮歴史読本』（白揚社、1937年）（日本語）
- 『朝鮮近代史研究』（朝鮮歴史編纂委員会、1947年）（朝鮮語）
- 『米帝朝鮮侵略史』（不詳、1951年）（朝鮮語）
- 『朝鮮歴史教材』（政治経済学アカデミー、1951年）（朝鮮語）

Ли Чён. Вон. Очерки новой Кореи. Пер. с корейского А. М. Пака. / Под редакцией и с предисловием проф. М. П. Кима. М.: 1952. (ロシア語)

『朝鮮近代史』(新華書店、1955年)(丁則良、夏禹文訳)(中国語)

『朝鮮におけるプロレタリア・ヘゲモニーのための闘争』(科学院、1955年)(朝鮮語)

『壬辰祖国戦争』(不詳、1955年)(朝鮮語)

『朝鮮近代史』(大月書店、1956年)(川久保公夫・呉在陽訳)(日本語)

2・論文・翻訳・その他

「振興? 満州国に朝鮮農民の生路」『우리 동무』(ウリトナム) 1933年1月1日号(日本語)
(李青垣)

「朝鮮農業の根本問題」『大衆経済』1934年1月号(日本語)

「朝鮮に於ける小作農の状態と小作令の制定(資料)」『経済評論』第1巻3号(1934年11月)
(日本語)

「『朝鮮社会経済史』を読む」『唯物論研究』26号(1934年12月)(日本語)

「朝鮮に於ける階級分化に就いて」『文化集団』第3巻第2号(1935年2月)(日本語)

「アジア的生産様式と朝鮮封建社会史」『唯物論研究』30号(1935年4月)(日本語)

「第一部・アジア的生産様式について」「第二部・朝鮮封建社会史(草稿)」

「朝鮮封建社会史(二)」『唯物論研究』31号(1935年5月)(日本語)

「アジア的生産様式とは何か」『生きた新聞』第1巻第5号(1935年5月)(日本語)

「朝鮮の火田民とは?」『労働雑誌』第1巻3号(1935年6月)(日本語)

「朝鮮社会経済史の研究について」『社会』第4巻6号(1935年7月)(日本語)

「朝鮮原始社会研究」『東亜』1935年7月号(日本語)

「亜細亜主義的生産様式に関して」『新東亜』47号(1935年9月)(朝鮮語)

「震檀学報第三巻を読んで」『東亜日報』1935年11月9日~14日(3回)(朝鮮語)

「朝鮮人思想における「アジアの形態」に対して」『東亜日報』1935年11月30日~12月5日
(5回)(朝鮮語)

「昨年中国日本学界に現われた朝鮮に関する論著に対して」『東亜日報』1936年1月1日~6日
(4回)(朝鮮語)

「朝鮮原始社会」『批判』第4巻2号(1936年3月)(朝鮮語)

「朝鮮の文化とその伝統」『東亜日報』1937年11月2日~5日(3回)(朝鮮語)

- 「新羅の花郎制度再批判」『東亜日報』1938年2月6日～9日（4回）（朝鮮語）
- 「朝鮮封建的構成の成立過程」『批判』第6巻11号（1938年11月）（朝鮮語）
- 「朝鮮革命論」『思想月報』19号（1939年6月）（李青桓・宋賛讚・黄炳仁）（日本語）
- 「江華条約の歴史的教訓と締結当時の国内情勢」『歴史諸問題』1号（1948年8月）（朝鮮語）
- 「金日成將軍パルチザン闘争の歴史的意義」『歴史諸問題』2号（1948年9月）（朝鮮語）
- 「甲午農民戦争の性格とその歴史的意義」『歴史諸問題』3号（1948年10月）（朝鮮語）
- 「20世紀初朝鮮の対外関係と国内情勢」『歴史諸問題』4号（1948年11月）（朝鮮語）
- 「三・一運動と朝鮮民族解放運動」『歴史科学』1955年3号（同年3月）
- 「反日民族解放闘争におけるプロレタリアート・ヘゲモニーのための闘争」(上)『歴史科学』
1955年9号（同年9月）（朝鮮語）
- 「反日民族解放闘争におけるプロレタリアート・ヘゲモニーのための闘争」(下)『歴史科学』
1955年10号（同年10月）（朝鮮語）
- 「朝鮮の民族ブルジョアジーの特質」『朝鮮月報』4、5号（1957年3月、4月）（日本語）
- [国史編纂委員会編『北韓歴史学論著目録』全2巻（同会、2001年）、その他より著者作成]

〔付記〕

本稿は「2003年度新潟国際情報大学共同研究費」の助成を受けたものである。